

二巻本「宝物集」における細川文庫本の位置について

田中，潤子
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/12063>

出版情報：語文研究. 50, pp.11-18, 1980-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

二巻本「宝物集」における細川文庫本の 位置について

田 中 潤 子

れたにすぎない。

ここではこの細川文庫本を取り上げ、他の二巻本と比較しながら、それが二巻本諸本においてどのような位置を占めるものであるのかを考えてみたいと思う。

細川文庫本「宝物集」は上下二冊。縦二四・二厘、横一八・一厘の列帖装。表紙は紺地に金色の草花模様、縦一四・二厘、横二・九厘の題籤に「宝物集上(下)」とある。見返しは模様入りの金紙。上巻は四帖から成り紙数七八枚、墨付き七一枚、下巻は紙数九〇枚の五帖から成り、墨付き八二枚。料紙は斐紙で漢字仮名交りの一面一〇行書き。ただし、漢字はそれほど多くはなく、ほとんど仮名書きである。本文第一行目に「宝物集上(下)巻」、巻末に「宝物集物語上(下)終」とある。奥書きはない。

比較には「築瀬一雄校合二巻本宝物集」^{注5}を用いた。これは、築瀬氏所蔵本を底本に、松井簡治博士旧蔵本、国会図書館上野分館本を校合されたものである。小泉氏の挙げられた一本のうち、存在のみ

鎌倉時代に成った仏教説話集「宝物集」に多種多様の伝本のあることは広く知られている。小泉弘氏は古典文庫の解説において、巻数や説話の有無などにより、それらを七類に分けられたが、^{注1}その中で原本に最も近いと目されるのは第一類、すなわち、一巻本系のものである。作者平康頼の自筆本と言われる宮内庁書陵部蔵本を含む第一類の本文は、しかしながら、残念なことに首尾を欠いており、完本としては第二類以下の諸本に求めざるを得ない。従って、「宝物集」が一巻本より始まり次第に巻数を増して行ったと考えられる以上、^{注2}一巻本系の次に重視されるべきは第二類、すなわち、二巻本系の諸本であるといえよう。

小泉氏によれば、第二類には一種の伝本が挙げられている。^{注3}細川文庫本もそのひとつであるが、「未見ながら次の如き伝本の存在が報告されている」として名称を記されたのみである。また、宗政五十緒氏の論文にも見えるが、上下二巻の分巻形態について触れら

示されて詳細の伝わらない三本以外の八本中六本は、この三種に分類することができるので、二巻本系諸本における細川文庫本を考える場合、まずこれらとの比較を行なってみて良いだろう。

以下、各本文の比較検討に移る。

二

さて、細川文庫本と三本の本文を比較してみると、漢字書き仮名書きの違いや仮名遣いの違い、送り仮名の有無など、文字遣いに関するものを一応除いて、大小合わせ異同箇所は全部で九九七ある。そのうちのおよそ半分、四六九は、誤脱誤写など何らかの誤りによるものである。たとえば次のように。

①あかごをはじめてなくこゑは（細上巻44丁ウ・築）——あかごの（松・上）

②とし月はいるやのごとくくれゆくなり（細上31ウ・松・上）——
くれやすくなり（築）

③じきをうる事なかりしなり（細上67オ・築・上）——なかりなり（注）

④すなはち（細下35ウ・築・松）——すはち（上）

①は細川本・築瀬本が、②は築瀬本が、それぞれ、「の」を「を」に、「ゆく」を「やすく」に誤写したもので、③は松井本が「し」を、④は上野本が「な」を、それぞれ誤って書き落としたものと思われる。

今、誤りによると考えられるこのようなものを除外し、残った五二八の異同数を細川本を中心にして対立する本文別にまとめると、

表Iが得られる。それぞれにあてはまる例を次に記す。

表I

A	細——築・松・上	24
B	細・松・上——築	8
C	細・築・上——松	140
D	細・築・松——上	230
E	細・築——松・上	122
F	細・松——築・上	2
G	細・上——築・松	2

A ⑤かねのこゑをだにきけば（細上7オ）——こゑをだに（築・松・上）

⑥まいにちにちに百石のこめをくう（細上66オ）——まいにちにちに百石の（築・松・上）

B ⑦母はあやしみて（細下38オ・松・上）——母はあやしみて（築）

⑧これもおなじやうにいひてうちわらひてありければ（細下59ウ・松・上）——ひいいいちうちわらひて（築）

C ⑨ひとつのもんじ。かぜにふかれて（細下18ウ・築・上）——もんじの（松）

⑩みだをせうねんして（細下76・築・上）——みだを念じて（松）

D ⑪又は人さし出て（細上8オ・築・松）——又そばなる人（上）

⑫こうといふは（細上39オ・築・松）——こうと申は（上）

E ⑬はけきやうのひもをときはんべるほどに（細上5ウ・築）——

ときよみはんべる(松・上)

⑭あしをあげあかきはねをたれて(細上62オ・築)——あしをあげ

○はねをたれて(松・上)

F⑬九でうの右大へん(細下19オ・松)——右大じん(築・上)

⑯のべ給へり(細下46オ・松)——の給へり(築・上)

G⑰げんせをいのるはわらちをこふるがごとし(細上9ウ・上)——

こふる○ごとし(築・松)

⑱ほとけ○のたまはく(細下23ウ・上)——ほとけののたまはく

(築・松)

まず、A B C Dの項からは、独自本文の多少について、すなわち、築瀬本・細川本は独自性というものがほとんどなく、松井本・上野本、特に上野本は独自性の高いことがわかる。次に、E F G項より、細川本と築瀬本、松井本と上野本との結びつきが他の場合よりも強いことがいえるだろう。前者は上野本の本文の特殊性を、後者は細川本と築瀬本の近接性を示すものと思われる。

しかしこの場合、異同の大小すなわち、一文字程度の違いも数行に及ぶ違いもすべて等しく扱ってあるので、この点を考慮して、表Iの数値を、一文字の違い、二文字以上の違いに分けてみると、表IIのようになった。

結果は先の場合と変わらない。むしろ、上野本の特殊性、細川本と築瀬本の近接性を一層際立たせることになったようである。

三

さてここで、新しい資料として用いた細川本に注目してみよう。

表I、表IIに現れた数値から見ても、細川本は独自性は低く、築瀬本に近い関係にあることが予想される。そこで、細川本と他の三本との異同を延べ数にしてみたのが表IIIである。

細川本と築瀬本の関係は、他の二本の場合に比べて非常に密なものであることが、これからもいえるだろう。二文字以上の違いについて見ると、築瀬本とはわずか七であるのに対し、松井本とは一二九、上野本に至っては一九〇にも上っているのである。さらに次のような例のあることは、細川本と築瀬本が同一の祖本を持つものであること、もしくは、一方が一方を写した可能性のあることを思わせる。

⑲われはきやうろんをさとりたりしがゆへに、にんがいにむまれたりといへども、だんばらみつのきやうろんをさとりたりしがゆ

表II

		1文字の違い	2文字以上の違い
A	細—築・松・上	19	5
B	細・松・上—築	7	1
C	細・築・上—松	60	80
D	細・築・松—上	90	140
E	細・築—松・上	78	44
F	細・松—築・上	1	1
G	細・上—築・松	2	0

表III

	総数	1文字の違い	2文字以上の違い
細—築	36	29	7
細—松	288	159	129
細—上	378	188	190

へに、にんがいにむまれたりといへども、だんばらみつをぎやうせざりしゆへに、一ぱつをむなしくして、じきをえがたし(細上66オ・築——波線部分ナシ)(松・上)

⑳ おなじみちを。おなじやうにこそ(「モチヲ」くはめ)(細上32オ・築)——おなじみちをおなじやうにゆけばおなじやうにこそくはめ(松・上)

㉑ をんをすてゝむるに在る物、しんじつのをん。なり(細下17オ・築)——しんじつのおんをほうする物なりと仏の説給へる也。されば、おやのをんは三界のうちをなれざるおんありなり。師匠のおんは三界をはなれてむるに在るしんじつのをんなり(松・上)

㉒ 又いはく……ごくちうざいしゆじやうわうじやう。すといへるなり(細下35ウ・築)——ごくちうざいしゆじやうわうじやう安楽国といへり。此心はあみだのせいぐわんほどふしぎなるはなし、ごくちうの衆生なれ共極楽(往生)すといへるなり(松・上)

㉓ いまにいたるまでくわん。みやうだうもかたさりたてまつる事なからん(細下74ウ・築)——いまにいたるまで関白殿下と申はその御子孫なり。あくりやうしやけもおそれたてまつるは法華経なり。いかでみやうくわんみやうだうも(松・上)

㉔ 十悪五逆の物させみだ。によらいくわんをんせいしをぐし給ひて(細下79オ・築)——弥陀のひぐわんにはもれず。いはんや弥陀をたのみ奉り一生の間称念せん物におひてをや。みだによらい(松・上)

⑲は同一の行を二度書き写してしまったもの、⑳は「おなじ」、

㉑は「をん」、㉒は「わうじやう」、㉓は「くわん」、㉔は「みだ」の部分で、教行を隔てたところにある同一文字の部分に目移りを起こし、その間の行文を書き落としてしまったものである。

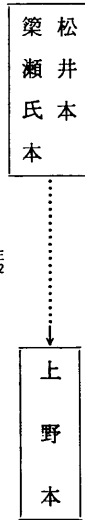
これらが、細川本と築瀬本において、おのおの独立してなされた誤りであるとは考えられない。偶然のなせるわざと言うにはあまりにも一致すぎているからである。従つて、この場合やはり先に述べたように、一方が一方を書き写したもののか、あるいは、二本が共通の祖本を持つものだと考えるべきであろう。又、たとえば②の場合、「関白殿下」「冥官冥道」と、両方もしくはどちらか一方だけでも初めから漢字で書かれていたならばこのような誤りは起こらなかつたものと考えられ、この祖本の前段階に位置するものは、恐らく漢字の少ないほとんどが仮名書きの本文を持っていたに違いない。

四

前章では細川本が築瀬本に極めて近いこと、すなわち、直接の写本関係にあるものか、又は共通の祖本を持つものであることを述べた。そこで次に、第二章で得たもうひとつの結果である。上野本の特殊性という点について検討し、さらには細川本以下四本の相互関係について考えてみようと思ふ。

さて、二巻本諸本の関係については、築瀬一雄氏がかつて、築瀬本、松井本、上野本三本の「顕著な異同箇所一〇〇条を摘出し」てその「親疎関係を計量」され、「(1)松井本と上野本とが最も近く、(2)架蔵本(築瀬本——筆者注)は松井本にやゝ近いと云う結論が認められる。しかし、A中略V三本間の関係は、前承後継と云ふ単純なも

のではなく、二巻本の祖本とも云ふべきものを想定しなければならぬ。」と言われ、後、渥美かをる氏が、築瀬本と松井本は、「いずれも下巻を『浄土十二門』から起こす点に一致を見、詞章も著しく近接しているから同類本と見なすことが出来」、上野本は「全面的に小異が多く、この点で松井本、築瀬氏本と隔った存在である。」とされた。^{注11}又、上巻冒頭部の清涼寺釈迦像伝をはじめとして、「全面にわたる小異も多くはこの本上野本——筆者^{注12}の加筆増補なのである。」として、二巻本は



のように「発展」したと述べられた。^{注12}

しかし、築瀬氏の論では任意に抽出した一〇〇条に関してのみの調査結果であり、三本の関係についてはほとんど言及されていない点に不満が残る。又、渥美氏の論では、築瀬本と松井本とを同類と言われた理由の「詞章の著しい近接性」が具体的にどの程度のものであるかが明らかにされていないし、仮に中間にいくつかの段階を置くとしても、築瀬本・松井本から上野本が発展したとされた点に疑問を感じる。ここでは問題を

(1) 築瀬本と松井本の親疎関係がどのようなものであるのか

(2) 上野本の独自性が何によるものか、すなわち、築瀬本・松井本

の両方もしくは一方に増補加筆したものであるのかどうか^{注13}の二つとして、それぞれ考えてみることにする。

まず第一の、築瀬本と松井本の関係について。

第一章に挙げた表Iをもとに、築瀬本と他本との異同を延べ数にして、表IVが得られた。

表IV

	総数	1文字の違い	2文字以上の違い
築一細	36	29	7
築一松	272	147	126
築一上	362	177	185

これを見るに、築瀬本と松井本とが同類であるとは言いがたい。築瀬本と松井本との近接性は築瀬本と細川本のそれとは比較にならず、仮に、築瀬本と松井本が同類であると言うならば、築瀬本と上野本の同類関係を否定しざる根拠もなくなってしまふだろう。従って、ここでは、築瀬氏が言われたように、築瀬本は上野本よりは松井本に近いという程度に止める。渥美氏の論は非常に大きな視点に立った時のみ、成り立つものであったのだ。

続いて表Vは、上野本を中心として、他の三本との異同の状態を延べ数にしたものである。

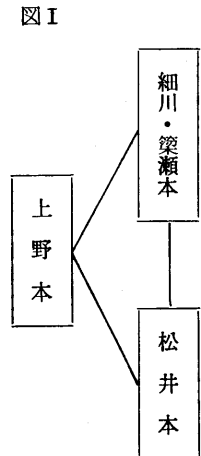
表V

	総数	1文字の 違い	2文字以上の 違い
上—細	378	188	190
上—築	362	177	185
上—松	374	153	221

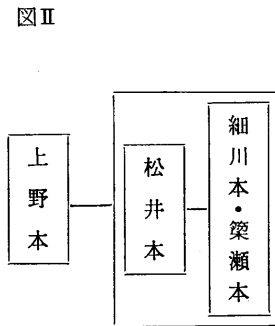
これを見るかぎり、築瀨氏の述べられた「松井本と上野本とが最も近^{注1}」ことを肯定することはできないのであって、上野本と細川本・築瀨本・松井本との関係はおのおのほとんど同程度の近接性を有しているといわざるをえない。

従って以上から、細川本・築瀨本・松井本・上野本の四本については、

- (a) 細川本と築瀨本は非常に近い
 - (b) 細川・築瀨本は上野本よりは松井本に近い
 - (c) 上野本は他の三本とそれぞれほぼ同じくらいの近きにある
- の三つが結果として得られた。今、時の流れを考慮せず四本の位置関係を示せば次のようになる。



より大きな視点に立って、(b)から、細川本・築瀨本・松井本をひとつのグループと考えると、図Iは



とすることができらるだろう。

次に、この図IIをもとにして、問題点の第二番目、細川・築瀨・松井本と上野本の関係について述べる。

たとえば次に挙げるような語句の違いのあることは、細川本以下三本と上野本との継承関係を疑わせるものである。すなわち、上野本が三本に「意図的に加筆改筆した^{注15}」とするよりも、上野本には既にそのような形の祖本があったことを思わせる。

②⑤ひととせの春(細下7ウ・築・松)——天平勝宝廿一年(上)

②⑥せうくそのもんを申べし(細上25オ・築・松) されば金剛

般若経には(上)

②⑦又いはく(細上25ウ・築・松)——又出曜経には(上)

②⑧かいをたまたざるものはもろくのぜんこんをじやうじゆせ

ずとしへたり(細下21オ・築・松)——かいをたまてるものは

……じやうじゆす(上)

②⑨いぬはてあしをくらいてにしひんがしにはしり、からすはま

なをくじりてきたみなみにとぶ(細下61オ・築・松)——にし南

にはしり……東北にとぶ(上)

なうた、

③⑩十かい(細下31オ・築)——十戒(松)——十界(上)

③⑪この大ちの底へ落るる事を(細下46オ・築)——此の(松)——

子の(上)

③⑫とく(細下49オ・築)——得(松)——徳(上)

③⑬ほうもん(細下53オ・築)——法門(松)——法文(上)

③⑭まうしん(細下69ウ・築)——望心(松)——妄心(上)

のような違いのあること。今、一応、松井本を三本の代表として、

上野本が松井本を受け継いだものとするならば、松井本から上野本

に至る途中に仮名書きの本文を設定し、③⑬の例で言えば、松井本の

「此の」が一旦「この」と仮名書きされ、それを上野本が「子の」と

記した場合か、もしくは、松井本の「此の」を誤りであるとして

上野本が「子の」に訂正した場合が考えられる。しかしそれよりも、

細川本・築瀬本に見られるような仮名書きの祖本がまずあって、松

井本・上野本がおのおのそれを漢字で写したか、あるいは初めから

漢字で記された祖本がそれぞれにあった可能性の方が高いのではな

いかと思われる。

以上から、細川・築瀬・松井本と上野本との関係は、三本から上

野本が発展したとするよりはむしろ、この二つは兄弟関係にあると

考えた方がいいのではなからうか。渥美氏は上巻冒頭の清涼寺釈迦

像伝の部分の他に見られない上野本の独自性について、後の増補系

諸本が「ひとしくこの上野本の趣向を踏襲している」ことを、築瀬

本・松井本から上野本へという論の根拠のひとつにしておられる

が、上野本が三本と兄弟関係にあるとしても、後の諸本が上野本の

形の方を発展させたことの妨げにはならないであろうから、この点

五

以上、細川本・築瀬本・松井本・上野本四本の比較検討を通し

て、これらの相互関係について考えてきた。結論としては、

(1)細川本は築瀬本に非常に近く、恐らくは共通の祖本を持つもの

であること

(2)細川・築瀬本は上野本より松井本の方に近く、大きく見れば、

細川・築瀬・松井本と上野本とに分けられること

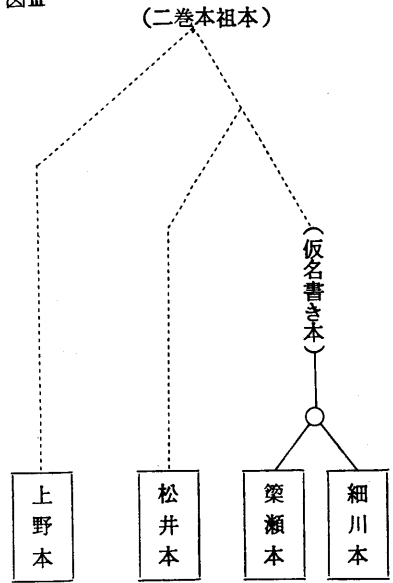
(3)細川・築瀬・松井本と上野本との関係は前後に連なるものでは

なく、兄弟関係にあると考えられること

の三つが得られた。

これらをまとめて図示すれば、次のようになるだろう。

Ⅲ



- 1 古典文庫23「宝物集」(中世古写本三種V) (昭和46年)
 2 橋純孝「宝物集異本研究」 (国語国文、昭和7年2・3・4月号) など

- 3 ①宮嶋本 (静嘉堂文庫現蔵)
 ②松井簡治博士旧蔵本 (静嘉堂文庫現蔵)
 ③国会図書館上野分館本
 ④瀬瀬一雄博士所蔵本
 ⑤大谷大学本 (昭和4年に②を影写したものの)
 ⑥川瀬一馬博士所蔵本 (②と同系)
 ⑦北大附属図書館本 (③に近い)
 ⑧無窮会神習文庫本
 ⑨小西五一博士所蔵本
 ⑩九州大学萩野文庫本
 ⑪九州大学細川文庫本
 以上詳細は注1の解説。なお、⑩は②に近いものと思われるが、詳しくは別の機会に譲りたい。

付記

- 4 「『宝物集』六巻本形態復元考」 (文学、昭和44年5月号)
 5 磯沖洞書第二輯 (昭和36年)
 6 注3の一本のうち、⑨⑩は名称のみ記されたもの。また、⑤⑥は②と同じもしくは同系、⑦は③に近いことから、②③④の三本について検討すれば⑤⑥⑦の本文に關してもほぼ同様の結果の得られることが予想される。
 7 以下例文を示すにあたっては、読みやすくするために濁点句読点などを適宜に加えた。
 8 以下諸本をその頭文字によって表わす。すなわち、細川文庫本、築瀬博士所蔵本、松井博士旧蔵本、上野国会図書館上野分館本。
 9 印は該当部分がないことを示す。以下同じ。
 10 「『宝物集』二巻本の研究」 (国文学研究、早稲田大学国文学会、復刊第七輯、昭和27年)
 11 「『宝物集』初期諸本の展開相」 (愛知県立大学文学部論集21、昭和45年) 注11に同じ。そのほか、「片カナ古活字版三巻本宝物集の諸本系統上の位置とその性格」 (愛知県立大学説林、19、昭和45年) でも同様のことを述べておられる。
 12 この(1)(2)には、ともに細川文庫本も加えられるべきであるが、前章で細川本と築瀬氏所蔵本の同等視せられてよいことを既に述べており、築瀬氏、渥美氏の論文との関係もあって、ここでは特に細川本の名は記さなかった。
 13 注10と同じ論文。
 14 注11の論文。
 15 注11の論文に同じ。
 16

成稿後、南里みち子氏「萩野文庫本『宝物集』翻刻と解題」 (福岡女子短大紀要11・12・13) のあることを知った。ご報告だけしておく。